独立行政法人　国立国語研究所　第１７回「ことば」フォーラム

方言の科学 ―ことばのくにざかい　富山―

共催　富山市教育委員会
後援　北日本新聞社，北日本放送
協力　富山市立図書館，富山大学人文学部　中井研究室

司会　相本芳彦（北日本放送アナウンス部長）

午後２時開演

ごあいさつ　　国立国語研究所理事　韮澤　弘志
富山市立図書館長　杉田　欣次

第一部

「方言の東西境界と富山」大西拓一郎（国立国語研究所主任研究員）

「富山方言の地域差」中井精一（富山大学人文学部助教授）

「社会構造と方言，その変遷」真田信治（大阪大学大学院教授）

休憩（２０分間）

ホワイエ（ロビー）にて国立国語研究所の刊行物の展示と，
政府刊行物の展示即売をしています。
富山大学中井研究室のデモンストレーションも行なわれています。
質問票は休憩時間終了までに係のものにお渡しください。

第二部（午後３時４５分ころ）

パネルディスカッション「富山方言を科学する」

手話の見える方向が限られます。御席は譲り合ってお使いください。
御用の方はお近くの係のもの（緑色の名札をつけています）にどうぞ。
お帰りの際には，是非アンケートに御協力ください。

方言の東西境界と富山

大西拓一郎
(国立国語研究所)

1. 東西対立

日本の方言が東と西に分かれることは，よく知られています。その一例を**図１**に示します。これは，「書かない」「読まない」「見ない」などの「ない」(「否定辞」もしくは「打消の助動詞」と呼ばれます)をどのように言うかを示した地図です。この地図も含めて，以後扱う地図では，私たち国立国語研究所が編集している『方言文法全国地図』のデータを利用して話を進めます。

図１では，東日本には(書か)ナイが，西日本には(書か)ンが見られ，東西に分かれているようすが明瞭にご覧になれます。実は，これは，さまざまな方言分布の中の一例であって，あらゆる場合に東と西に分かれるわけではありません。しかしながら，図１に示したような顕著な境界線が見られることは事実です。このように東と西で方言が分かれる分布模様は「東西対立」と呼ばれます。

2. 東西対立と富山県

さて，皆さんの富山です。

富山は，今回のフォーラムに「ことばのくにざかい」とうたうように，このあたりに東西対立の境界線があると思っておられる方も多いのではないでしょうか。それでは，境界線と富山はどのような位置関係にあるでしょう。

先の図１「(書か)ない」では，富山全域に西のンが分布しています。ンはさらに東隣の新潟に沿岸伝いに延びています。ですから，正確には富山が境界になっているわけではないことがわかります。しかし，境界線にきわめて近いことは確かです。

3. 東西対立のいろいろ

東西対立が見られるのは，図１「(書か)ない」だけではありません。そのほかの例を見ていきましょう。

図２は，「散っている(結果態)」です。「結果態」というのは，動作の結果の表現方法を意味します。東西対立としての注目点は結果態をーテイルの形で表現するか，ーテオルの形で表現するかです。東日本のーテイルと西日本のーテオルが対立しています。

図３は，「高く(ない)」です。この地図では，「高くない」の「高く」をどのように言うかが注目点で，東日本のタカクと西日本のタコー・タカー・タカが東西対立を示します。

図４は，「買った」です。この地図では，東のカッタと西のコータ・カータが東西対立です。図３と図４の西日本の形はウ音便形と呼ばれます。

動詞の否定形　（書か）ない　『方言文法全国地図』第２集80図より

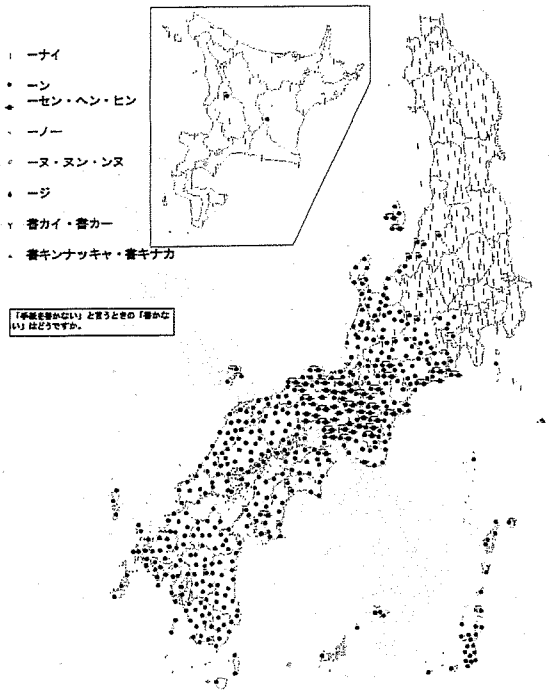


図１

散っている（結果態）　『方言文法全国地図』第４集199図より

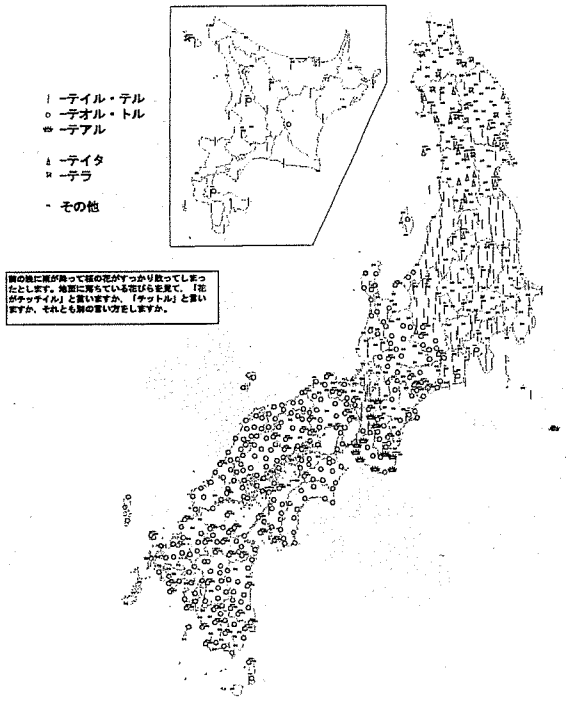


図２

高く（ない）　『方言文法全国地図』第３集137図より

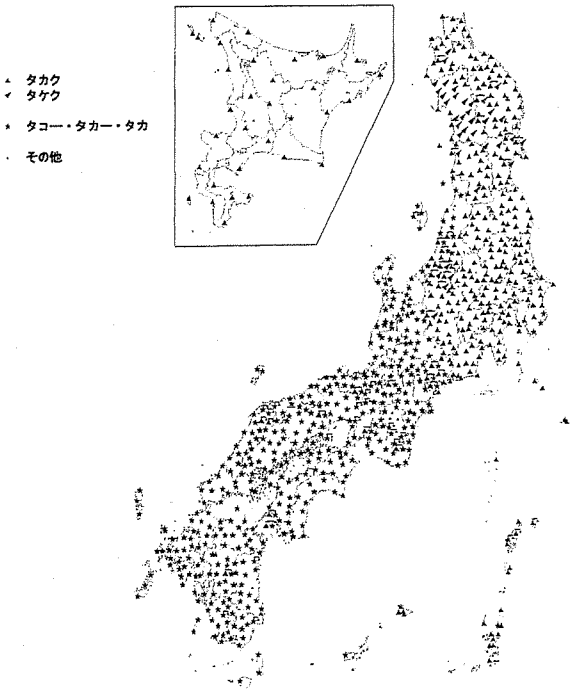


図３

買った　『方言文法全国地図』第２集105図より

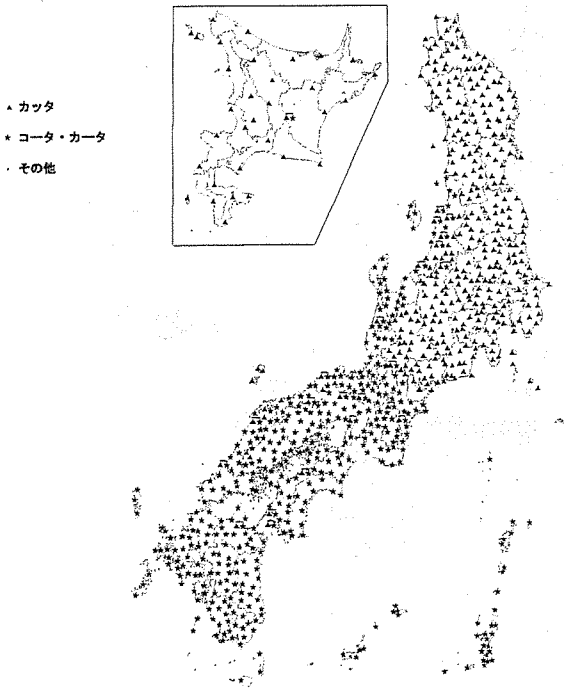


図４

見ろ 『方言文法全国地図』第2集88図より

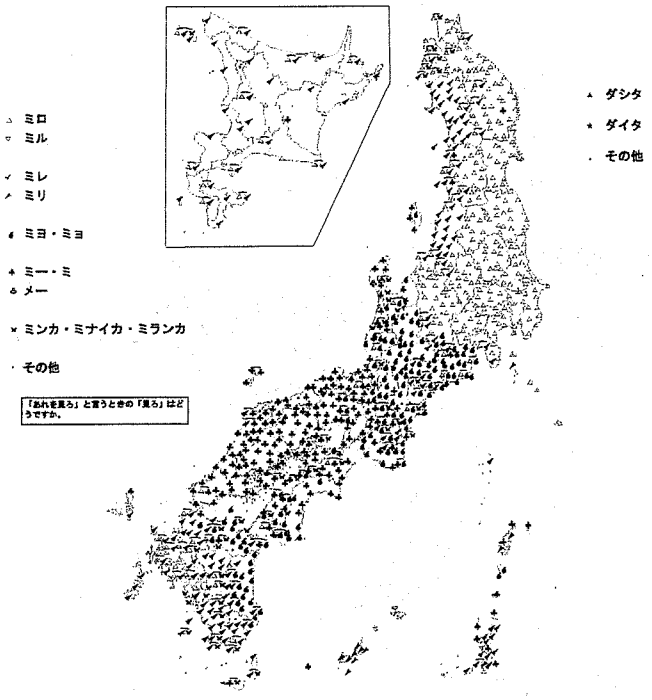


図５

出した 『方言文法全国地図』第２集92図より

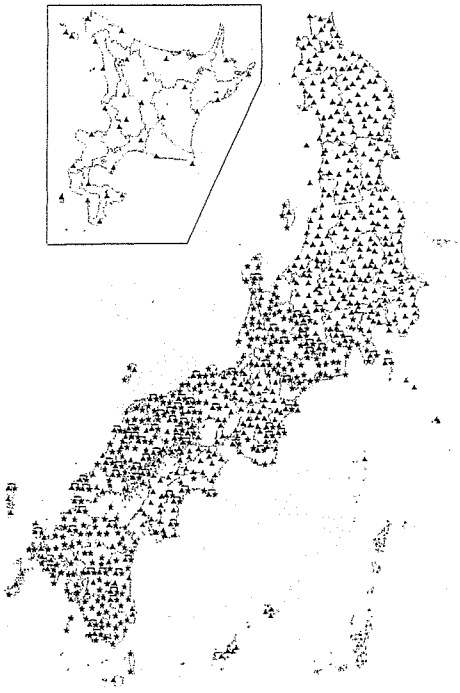


図６

静かだ 『方言文法全国地図』第３集145図より

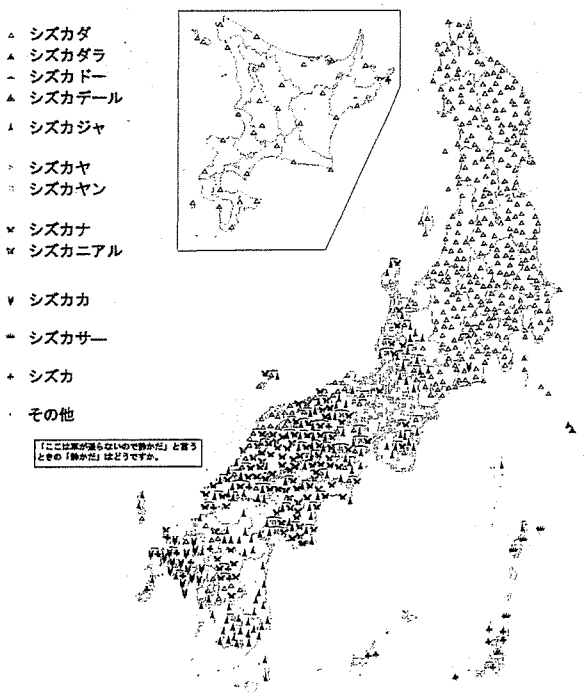


図７

以上に共通する特徴としてまず次のことが挙げられます。

(1)境界線の両側の分布が明瞭

このことは，境界線が明瞭であるとも言い換えられます。全国の基本的な形が２種類なので，当たり前に思われるかもしれませんが，この２種類が複雑に混じり合うのではなく，いわば水と油を注いだコップの中のように境目がはっきりしています。

ところで，実際には，もう少し複雑な分布模様が見られる場合も東西対立として扱われます。

図５は「見ろ」です。東のミロに対し，西にはミヨやミ・ミーが分布しています。東日本の単純な分布に注目して，これも東西対立として扱われます。

同様に**図６**「出した」では東が一面にダシタです。西は近畿を中心としてダシタが見られ，周辺部にダイタが分布しています。

図７「静かだ」でも，東が全体にシズカダであるのに対し，西は近畿を中心にシズカヤが分布し，それをとりまくようにシズカジャ，シズカナが見られます。

以上の図５～７においても東と西の境界線が明瞭であることにかわりはありません。そして，全体を通して，次のことが東西対立のもうひとつの特徴であることがわかります。

(2)境界線の位置が類似

それぞれの地図に見られる境界線は，幾分「ずれ」が見られるものの，おおむね，新潟県の糸魚川から静岡県の浜名湖にかけて引かれます。そして，この線は，日本アルプスと呼ばれる高い山並みに近いことが推測されます。

ここで「ずれ」について，ここ富山県を視点に据えて見るなら，次のようなことがわかります。

A.　西の形が新潟県側に延びる……図１「(書か)ない」，図３「高く(ない)」

B.　富山・新潟の県境にほぼ一致…図４「買った」，図５「見ろ」

C.　富山県内を境界線が走る……図６「出した」，図７「静かだ」

このような「ずれ」が日本アルプスとどのような位置関係にあるのかが気になるところですが，図１～７の地図ではよくわかりません。この点を詳しく見るために，境界線付近を拡大してみることにしましょう。

4. クローズアップ東西対立

方言研究の世界では，最近まで方言の分布地図を手作業で描いてきました。これは，かなり大変で手間のかかる作業でした。今回のフォーラムで示している地図は，すべてコンピュータを使って描いていますが，これができるようになったのは実は最近のことです。

コンピュータで方言分布図が描けるなら，方言のデータとそれ以外のデータを重ね合わせて地図を描いてみたいという気持ちがわいてきます。たとえば，山や谷と方言分布を重ねてみると面白そうではないか，というような知的欲求です。

これも手作業でできないことはないのですが，地図の重ね合わせというのは，実際にや

ってみるとわかることですが，かなりの時間と労力を要します。コンピュータに行わせるというのも，簡単そうでなかなかやっかいなことでした。調査地点という不連続なデータと標高のような連続性のあるデータを地図に描く手法には，それぞれ大きなへだたりがあるからです。また，データの位置情報の基盤が統一されていないと異なる種類のデータを統合して扱うことはできません。

しかし，これも GIS と呼ばれる技術を利用することで可能になってきました。GIS というのは Geographical Information System の略称で，「地理情報システム」と訳されます。GIS の技術は，すでに市場調査や土木建築など実用的な世界では活用されていますが，方言研究のような基礎研究の分野ではまだまだ定着するにはいたっていません。しかし，比較的入手しやすく使い勝手も悪くないソフトが開発されてきていますので，これからおおいに利用されていくことでしょう。

さて，前章までは海岸線や都道府県境界の地図に方言の分布を載せて見てきました。図8～14には，GIS を利用して，方言データに標高を重ね合わせ，東西の境界線付近を拡大して示します。なお，県境は富山県のみ目立たせました。

これらの地図から以下のことがわかります。

(1)境界線は日本アルプスの谷間を走る

東西対立の境界線は，北アルプス(飛騨山脈)の東側，JR 大糸線の走る谷間，そして，中央アルプス(木曽山脈)と南アルプス(赤石山脈)に挟まれた伊那谷におおむね一致しています。言い換えるなら，北アルプス・中央アルプスが西側の領域の東端ということになります。

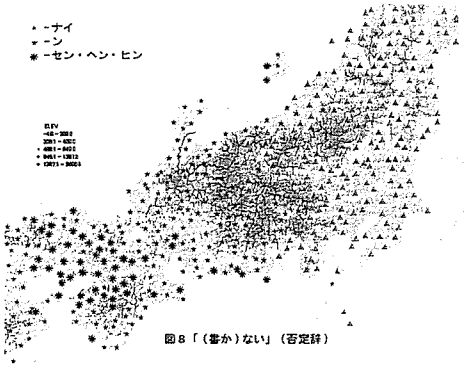


図8「(書か)ない」(否定辞)

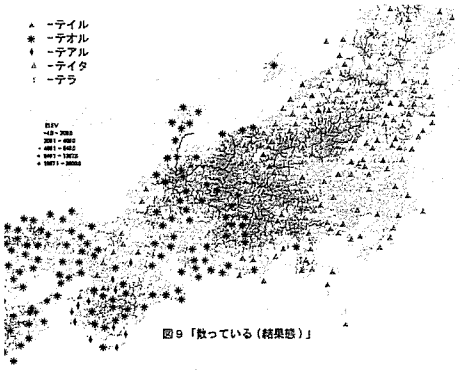


図9「飲っている(結果態)」

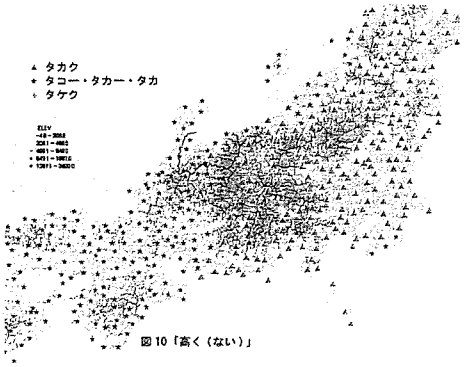


図10「高く(ない)」

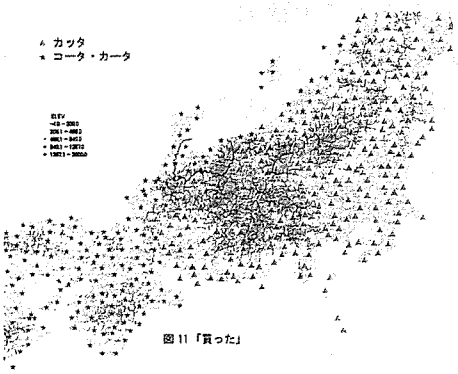


図11「買った」

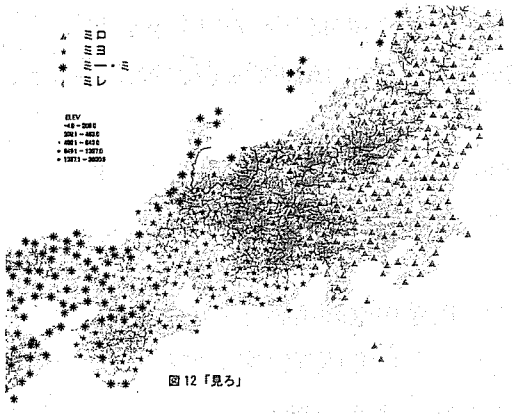


図12「見ろ」

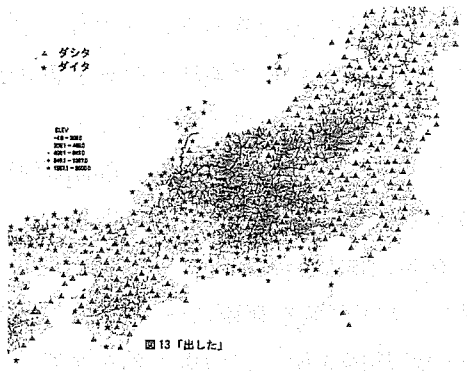


図13「出した」

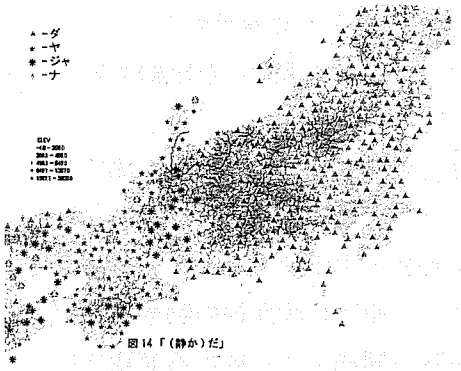


図14「(静か)だ」

ですから富山県は西側の一番東のはしに近いところに位置するわけで，境界が少し西側にずれる地図では，県内を境界線が走ることになります。

(2)境界からのずれは海岸線に沿う

境界線からずれる場合は，海岸線に沿って東側にずれる傾向があります。

A. 日本海側で東にずれるもの…図８「(書か)ない」，図 10「高く(ない)」

B. 太平洋側で東にずれるもの…図８「(書か)ない」，図 12「見ろ」，図 13「出した」

(3)内陸でのずれは沿岸部から連続する

内陸だけがふくらむ形で東西どちらかにずれることはなく，内陸での「ずれ」は，沿岸部からの連続です。

図９「散っている(結果態)」では，伊那谷に西の形が分布していますが，太平洋沿岸の分布に連続しています。図８「(書か)ない」でも伊那谷に太平洋沿岸からの連続した分布が見られるとともに甲府盆地にも谷を通った西の形の分布が入り込んでいます。

ただし，すべてが以上の特徴に沿うものではなく，図 11「買った」は境界線が大きく西に偏っています。この場合は，むしろ近畿の東端にあたる鈴鹿・伊吹・両白といった山地が境界線となっているようです。また，図 14「(静か)だ」も境界線が西に偏るとともに，境界付近で東西の形がやや入り組んでいます。

5. 時の流れと東西対立

日本の東と西でことばに違いがあることは古くから知られていました。例えば,『万葉集』

には「東歌」「防人歌」といった巻がありますが，この中には当時の東日本の方言を反映した歌が見られます。もっとも，この時代の東と西の境界線については地図に描けるほどくわしいことがわかっているものではありません。

時代が大きく下って，明治時代になると国語調査委員会が文部省に設置されます。標準語の設定の基礎作業を目的に全国調査が実施され，それに基づく地図が描かれました。この調査は，次の有名な結論を導き出しました。

「仮に全国の言語区域を東西に分たんとする時は大略越中飛騨美濃三河の東境に沿ひてその境界線を引きこの線以東を東部方言とし，以西を西部方言とすることを得るがごとし」（『口語法調査報告書』上「口語法分布図概観」，表記を一部変更）

この境界線を提示する地図を**図 15**「ない（否定辞）」と**図 16**「見ろ」に挙げます。

これを現代の地図と較べてみましょう。図 1 と図 15，また，図 5 と図 16 を比較すると実は，境界線にあまり大きな違いがないことがわかります。

今，明治時代と現代，約 100 年隔たった地図を提示しました。これらはいずれも国家規模で行われた調査によるものですが，実は，この間にひとりでこつこつと境界線を調べたアマチュア方言研究家がいらっしゃいました。長野県諏訪の故・牛山初男さんという方です。牛山さんは高校の先生をなさりながら自らの足で調査して東西の境界線の動きを検討され，非常に有名な論文を発表なさいました（牛山初男（1953）「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12，牛山初男（1969）『東西方言の境界』）。その経緯については，信州大学にいらっしゃった馬瀬良雄氏が詳しく記しておられます（馬瀬良雄（2003）『信州のことば　21 世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社）。

このように東西の境界線は時が流れてもあまり変動を起こさないことがわかっています。

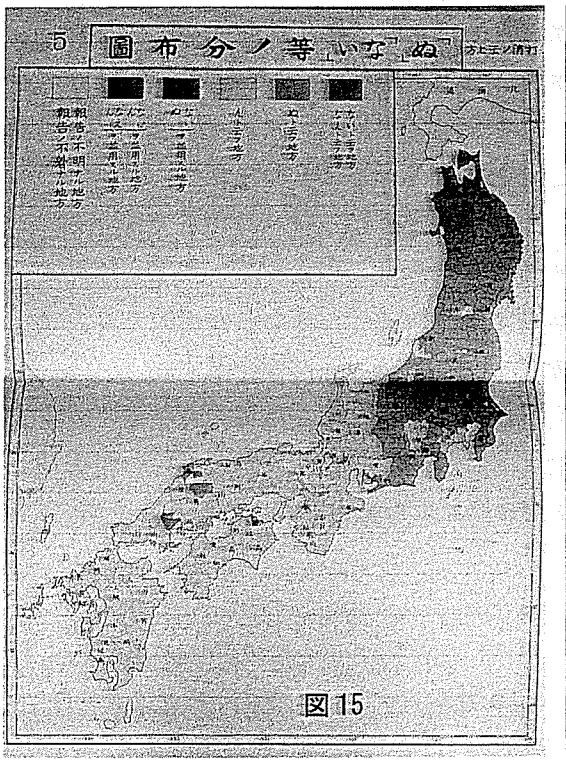


図 15

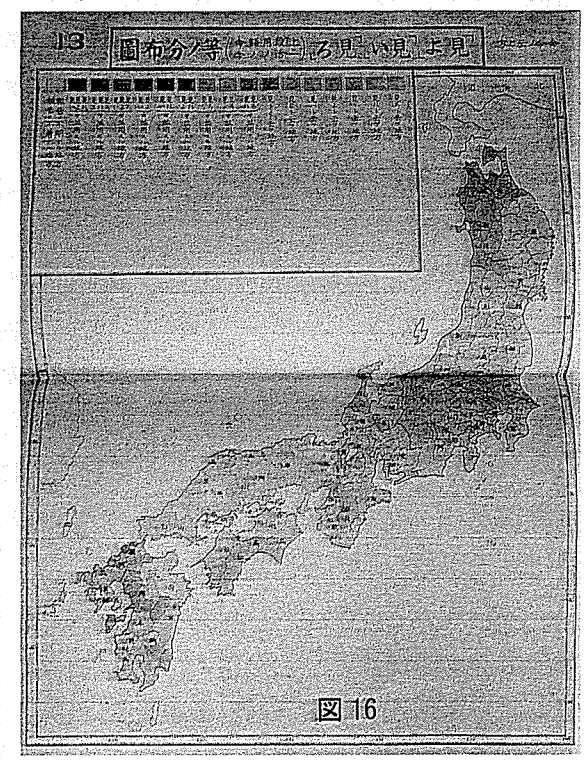


図 16

３節で東西対立の特徴を２点(1. 分布が明瞭，2. 境界線が類似)挙げましたが，この「境界線維持」を３番目の特徴として加えることができます。

6. 東西対立のなぞ

このように東西対立は，日本の方言の大きな特徴のひとつです。地理学など他の研究分野になぞらえるなら「大規模構造」と呼んでもよいでしょう。ですから，きわめて重要な位置付けが与えられるわけですが，どうしてこのような「大規模構造」が見られるかは，まだはっきりしていません。例えば，比較的大きな図書館でご覧になれる以下の本に説明が見られますが，いまだ定説にはいたっていません。

馬瀬良雄(1977)「東西両方言の対立」『岩波講座日本語 11』(岩波書店)

彦坂佳宣(2002)「東西方言の接点」『朝倉日本語講座 10』(朝倉書店)

なぜ，この東西対立という分布の説明が難しいかというと，中央(文化的中心地：日本全国を扱う場合は，畿内)からの放射により方言分布を説明する「周圏論」の方法や，周辺部の先行変化により説明する「逆周圏論」の方法(この２つはその名前に関わらず対立する考えではありません)など，方言の分布を説明する際に広く利用される方法を受け付けない分布模様を東西対立は提示するからです。

はたして，どのような経緯で東西対立はできあがったものなのか。方言分布の読みとり作業は，多くの場合さまざまに楽しい空想をかきたてますが，中でも東西対立は，どこか雄大な歴史ロマンを想起させます。これを明確な科学的根拠に基づき証明していくことが，これからも方言学に課せられています。

富山方言の地域差

中　井　精　一
（富山大学人文学部）

１．はじめに

私は，大阪や京都にほど近い奈良県北部の奈良盆地に生まれ，三十代の半ばまでそこから出て暮らしたことはありませんでした。

今からおよそ６年前に富山に職を得て北陸に来ましたが，「住めば都」とはよくいったもので，今の私にとって富山は第二の故郷のような気持ちをもって暮らしています。

ただこの土地に来た当初は，たとえば北に向かって自動車を走らせていて，どこで進行方向を変えたわけでもないのに「なんか東の方に向かってる。」あるいは「知らんあいだに西へ行ってしもた。」といったようなことがたびたびあって，ずいぶん戸惑ったように記憶しています。これは私の生まれた地域では，どのような細い小さな小径でも道路といものは東西南北，縦横十文字に切ってあるのが基本で，自分で右折や左折をしない限り北に進路をとっていたものが，知らないあいだに進行方向が変わってしまうようなことなどなかったからです。とにかく，町を歩くにも見知ったランドマークもなく，土地勘もないため富山に住んだ当座は，戸惑うことがとても多かったように思います。

「ところ変われば品変わる」というようなことばをよく耳にしますが，富山に来た当初，朝，新聞に挟まれているスーパーのちらしを見て「もみじこ」という広告を見たとき，はじめは私にはなんのことだかよくわかりませんでした。「大根と人参をおろして瓶詰めにでもしたもんかいな？富山ではもみじおろしも売ってんねんな。」などと思いながら，店頭に並んでいる実物を見て，「なーんや鱈の卵かいな。」と気づくようなありさまでした。暮らす土地が変われば，ことばも違うという当然のことをあらためて感じさせられたのでした。

関西と北陸は距離的にもさほど遠くないにも関わらず，方言に大きな違いがあるようです。今回は，私が富山にやって来て，この土地で学生とともに取り組んだ方言調査の結果をもとに，富山方言の地域差について考えてみたいと思います。

２．富山県方言の地域差

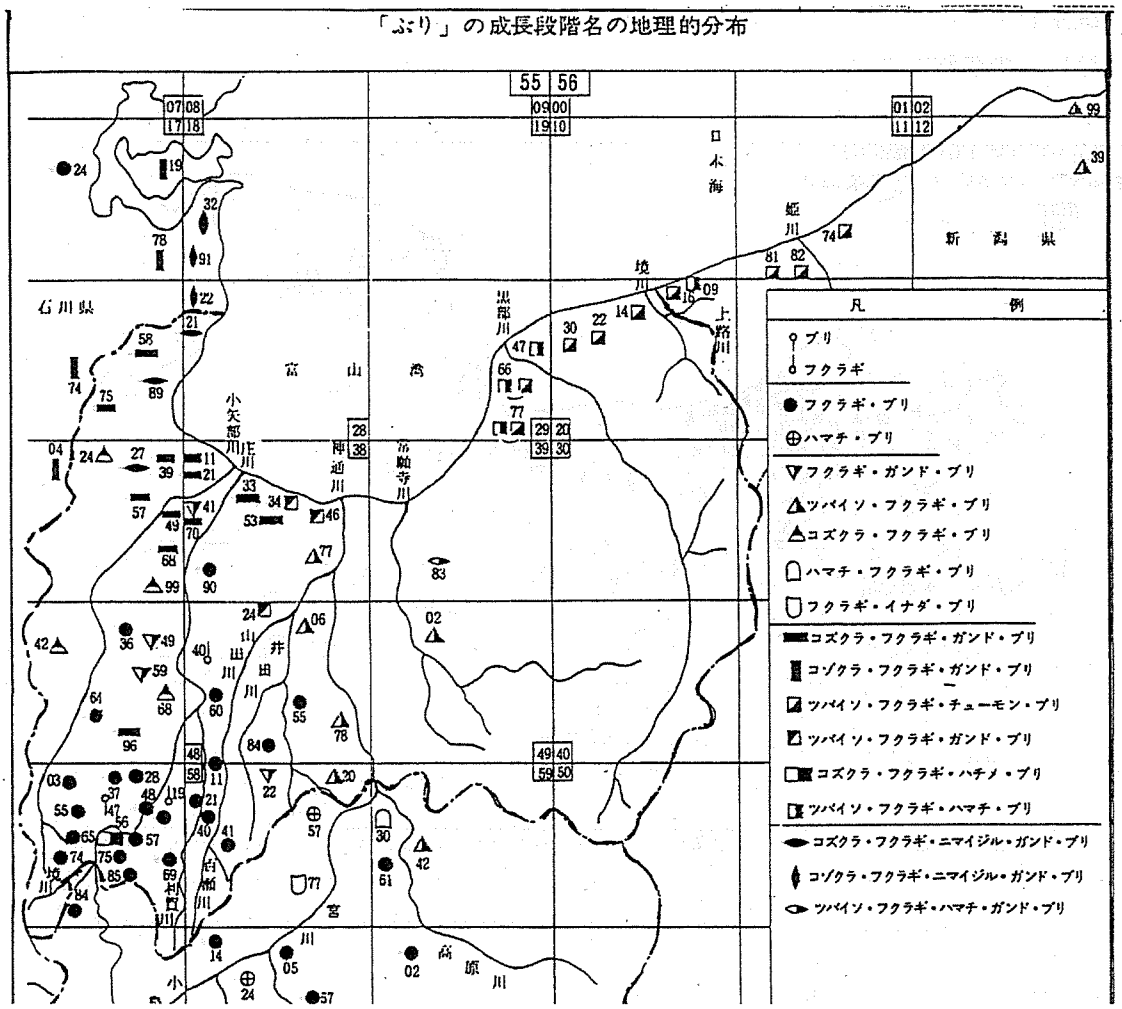
富山県は，西日本方言圏の東端にあって，京都や大阪といった近畿地方中央部で古い時代に使われていたことばが永い時間の経過にともなってこの地に定着したと見られる形式。また新潟や長野といった隣接する地域との交流から伝播したと考えられる東日本に分布領域をもつことば。そして，この地域で暮らす人々が，日々の暮らしの中でつちかってきた富山独自のことば。以上の三つが織り込まれ，独特の響きをもって話されています。

このような特徴をもつ地域は全国的に見てもめずらしく，近代期に日本の方言学界をリードした太田榮太郎先生の記憶などとともに，富山県は方言研究の盛んな地域としてよく知られています。

また，私どもの富山大学人文学部も，早くから地元・富山において方言研究に取り組み，都竹通年雄先生をはじめ，川本栄一郎先生など，ここに在籍した先生方の業績は国内の研究者たちから高い評価を得ています。

説明の資料として，私と学生がともに実施した調査資料（「富山県言語動態地図」「富山方言の新しい動き（新・富山総合調査）」「富山県音声言語地図」），ならびに，私どもの人文学部の先輩たちが取り組まれた研究成果から川本先生が実施された方言調査のデータをもとに考えることにします。

(1) 川本先生の方言調査から
「ぶり」成長段階の名称について



富山湾の冬の味覚といえば「ぶり」です。この回遊魚は関西では「年取り魚」として，たいへん珍重されています。また「出世魚」としても有名です。ただ私の故郷では「はま

ち→ぶり」といった出世しかしません。富山県内ではどうでしょうか。

富山県における「ぶり」の成長段階名の地域差は，具体的名称と段階数の２つの観点から捉えることができるようです。

フクラギとブリを基本にしていて，そこに，地域ごとに特色あるその他の名称が加わって，具体的名称と段階数の地域差が生じています。

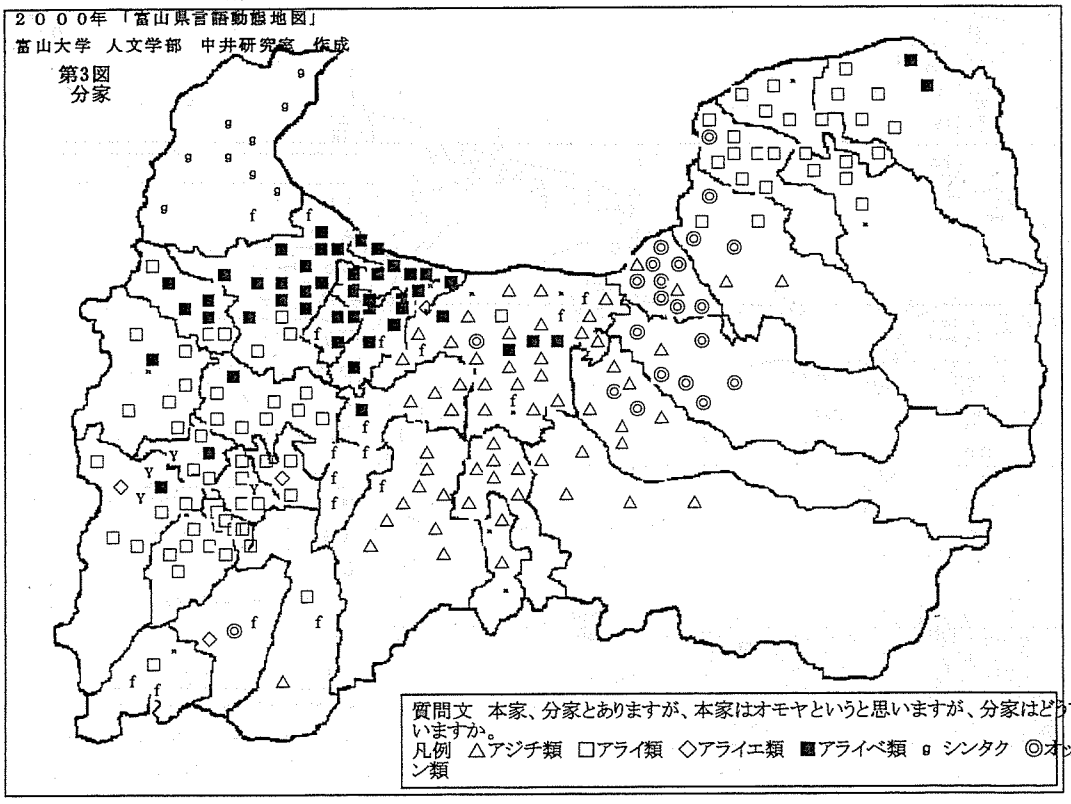
具体的名称としては，東部の「ツバイソ・フクラギ・チューモン・ブリ」と西部の「コズクラ・フクラギ・ガンド・ブリ」の２つに大きく分かれます。

また，段階数としては海岸部が４ないし５段階で認識されるのに対して，内陸部は２ないし３段階で認識されるという海岸部と内陸部による差異が認められます。

(2)「富山県言語動態地図」を資料として

「富山県言語動態地図」に関する調査は1999年2月～12月の約10ヶ月間にわたり，私が担当していた富山大学の日本語学演習，日本語学概論，そして教養原論の「言語と文化」の受講生を中心にしておこないました。

「分家」の名称について



調査は富山県下約 300 地点で計画し，こちらで指定した地点を，各市町村の教育委員会に依頼し，その紹介を受けた70歳以上の生え抜き話者420名に対して，富山方言の特色を踏まえて作製した調査票をもとに面接調査をおこなったものです。

調査結果は，以下の学生が中心になってまとめました。坂口直樹，今村太一郎・樋上慶一郎・市島佑起子・橋本知子・河越美華・川崎久美子・小山拓郎・宮下大輔。

地図を眺めてみましょう。富山県全体で見ると「分家」の方言の分布は，はっきりとした地域差を見せることがわかります。「△アジチ類」は，富山市を中心とした県の中央部で主に使用され，それを取り囲むような格好で，「□アライ類」が使用されています。「■アライベ類」は新湊や高岡を中心にした県の西部に密集して分布しています。

また，この他に特徴ある方言形としては滑川市を中心とした地域で「◎オッサン類」，氷見市を中心に「g シンタク」が見られます。

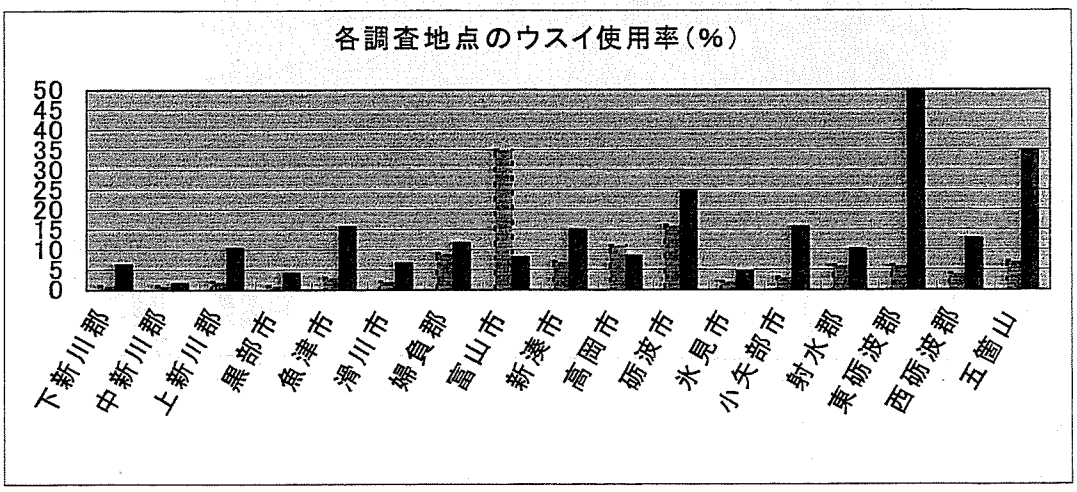
(3)「富山方言の新しい動き（新・富山総合調査）」について

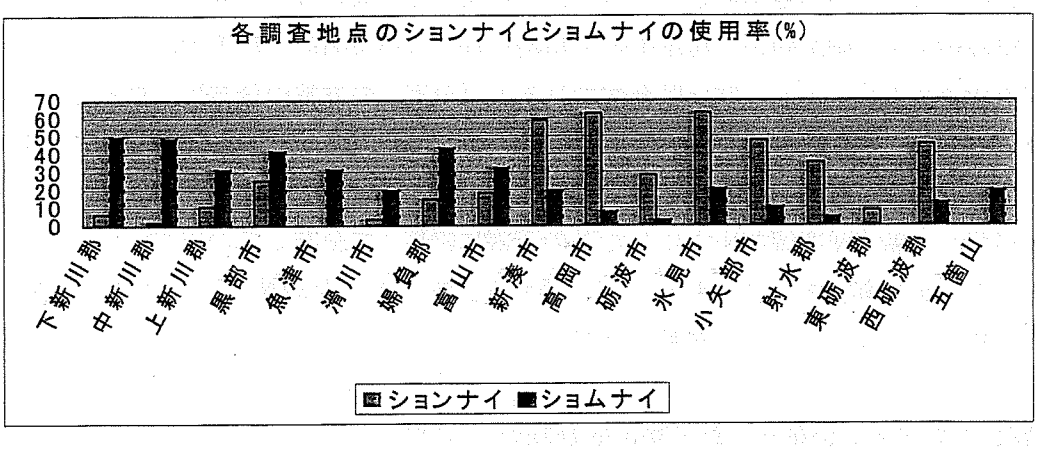
調査は2000年6月～2001年12月の約18ヶ月間にわたり，私が担当していた富山大学の日本語学演習の受講生を中心に実施しました。調査は富山県内に在住する1446人に対して語彙・語法・言語意識・生活意識など70項目の調査票を作製し，アンケート形式で質問したものです。調査結果は，以下の学生が中心になってまとめました。小山拓郎・西村春輝・新垣啓子・大森美木・五十嵐祐子・小菅祐子・五島奈緒子・井上瑞子・野上麻子・三輪勇人・中村雅志・岡村早映子・内藤智美・山崎千恵子・藤岡香織。

味がうすい

この調査は，「味が濃い」あるいは「塩辛い」の方言に続いて質問した項目です。グラフは，濃い色の棒線が使用率を示し，うすい色の棒線は使用者数を示しています。富山市でうすい色の棒線が高い数値を示しているのは回答者数が多いためです。

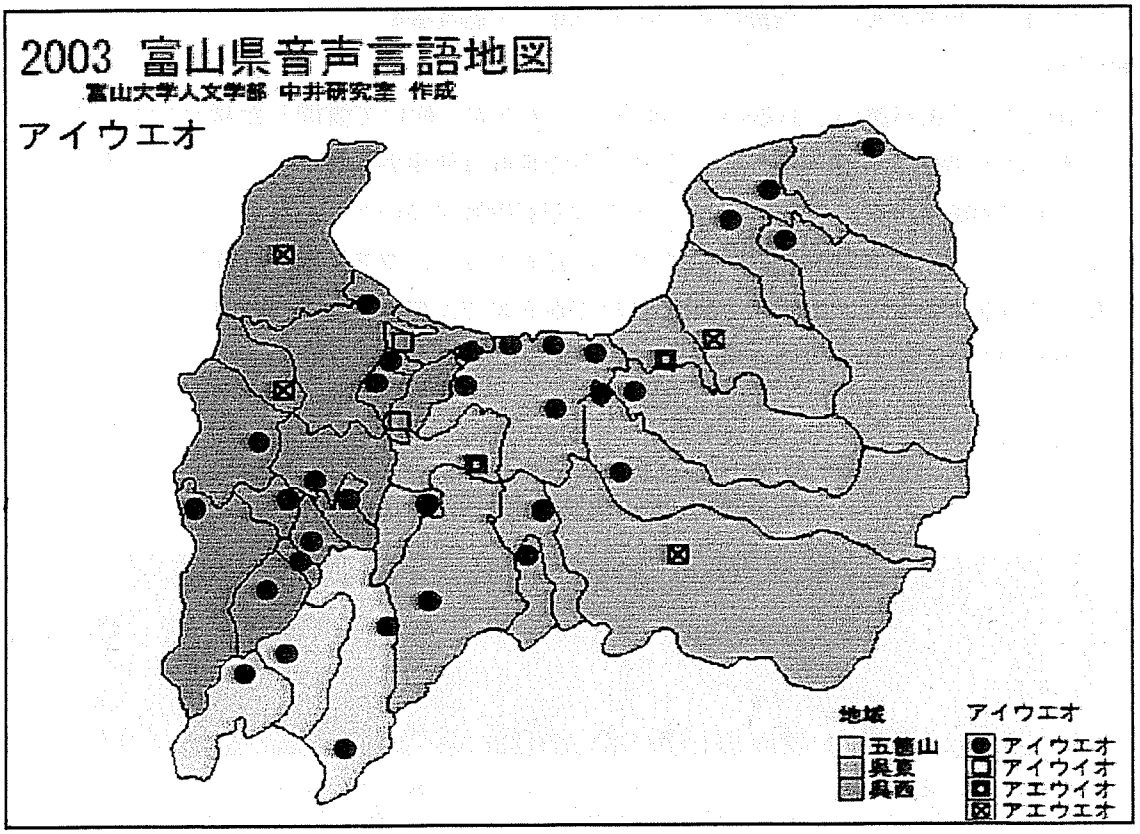
「味がうすい」の方言形について，ウスイに注目すると，ウスイは，富山県の西に行くほど使用率が高くなっています。関西を含めて西日本では広く，ウスイを使用していますので，県西部は，西日本方言の影響を強く受ける地域だといえます。





ションナイとショムナイについて，注目してまとめたのが，このグラフです。この2つの使用率を比べてみると，富山市を境に県東部ではショムナイ，県西部ではションナイの使用率が高いというはっきりとした違いが出ているといえます。

(4)「富山県音声言語地図」について



調査は2000年10月～2002年7月の約21ヶ月間にわたり，私が担当していた富山大学の日本語学演習の受講生を中心にしておこないました。調査では，音韻・アクセントを中心にした調査項目を読み上げてもらい，DATなどの高性能の録音機材を使用して記録しました。

音声言語地図は，地図上の記号をクリックすればその地点の実際の音声が再現される声による言語地図で，誰もが簡単に郷土の生の方言にふれることができるという特徴があります。研究の面でも実際の音声を聞いて検討・考察することができ，多くの研究者からの有益な情報の提供が期待され，研究を大きく前進させる可能性をもつと考えられます。

調査結果は，以下の学生が中心になってまとめました。小山拓郎・三輪勇人・中村雅志・岡村早映子・内藤智美・山崎千恵子・藤岡香織。

アイウエオの発音

この地図は，「あいうえお」の発音の特徴を示したものです。

富山県の発音は，東北方言などとよく似た傾向を示し「イ」と「エ」の混同が平野部，沿岸部などに見られることがあります。

この地図では，「イ」と「エ」の混同や入れ替わりが明確な地点（微妙であいまいな中間音的な発音をする地点）は，滑川市や新湊市などの海岸地帯や小杉町，婦中町などの平野部に確認されました。

3．まとめ

以上，富山大学人文学部がこれまで実施した方言調査の成果をもとに，富山方言の地域差について考えてみました。

富山県内には，県の東部と西部，いわゆる呉東と呉西の地域差に加えて，富山市を中心にした都市部と周辺部の方言の違い，あるいは海岸部と内陸部のあいだにはっきりとした方言の地域差のあることがわかりました。

富山県は，日本の西と東の文化が交錯する地域で，方言研究の世界では，方言のバリエーションが豊かな土地としてよく知られています。

方言が豊かであるということは地域が画一化されず，多様でさまざまな価値観があり，奥深い文化のあることを示しています。この豊かな富山の文化がいつまでも変わることなく，次代に受け継がれていくように方言の調査をとおして見守っていきたいと思います。

関連文献

真田信治（1979）『地域語への接近　―北陸地域をフィールドとして―』（秋山書店）
下野雅昭（1983）「富山県の方言」（『講座方言学　中部地方の方言』国書刊行会）
川本栄一郎（1989）「富山県における「ぶり」の成長段階名の分布と変遷」（『富山大学人文学部紀要』第14号）
中井精一・坂口直樹（2001）『富山県言語動態地図』（富山大学人文学部）
中井精一・小山拓郎（2003）『新・富山総合調査』（富山大学人文学部）印刷中
中井研究室（2003）『富山県音声言語地図 CD-ROM』（富山県未来財団）

社会構造と方言，その変遷

真田 信治
（大阪大学）

●

世界文化遺産・五箇山における伝統的方言では，「兄」「弟」「姉」「妹」<きょうだい>を個別に表すことばが存在してはいませんでした。したがって，そこでは男性対女性，年上対年下といった二つの軸での語彙の体系化自体がなされていなかったのです。もっとも，一般的に性の別を言い分けようとする場合に，「オトコキョーダイ」「メロキョーダイ」ということがありましたが，これはいわば特定称です。また，たとえば話し相手に対して，キョーダイの年齢の上下にしいて言及しなくてはならない場合には，「こりはオラが（私の）ウエ（上）じゃ」「こりはオラが（私の）シタ（下）じゃ」のような表現にしかならなかったのです。ちなみに，これらは英語での elder や younger などの形式と似ています。

当該方言がこのようなパターンをもつに至った要因は，この地の親族名称が，個人を中心としてではなく，個人の属する<家>を中心として系統化されているということによります。親族語の多くのものが「私の家の～」「彼の家の～」という文脈での「～」に代入できます。ここでの親族語は，単に個人と個人との親族的な関係の表示だけではなく，個々人の属する<家>の中での，その個人の地位（status）を考慮に入れた上での関係を表示するものなのです。

●

かつては長子家督相続が支配的な通念とされたので，長子は，惣領・後継ぎ・跡取りなどと呼ばれ，おもおもしい扱いがなされました。一方，次男，次女以下は<家>の非嫡系成員として一括して扱われたのです。東北，北陸，そして山陰東部などでは，「長男」をアニ，「長女」をアネ，そして次男以下をオジ，次女以下をオバと類別します。この「長男」および「長女」をそれ以外の子供と区別する体系は，長子家督相続の優越とともに，日本の地域的な一特徴ということができます。新潟県の一部で，次男をモシカアンニャとも称するところがありますが，これは長男に万一のことがあった場合には，アンニャ，すなわち跡取りになれる者という意味合いでの表現形です。

近世には，各地村落での人口がほぼ飽和状態に達したために，多くの村落では戸数の増加が制限されました。したがって，次・三男らは分家もできず，婿養子になるか村を出て行かない限り，オジボウなどと呼ばれて独身暮らしを強いられたり，生涯やっかい者扱いされたりする例が多くありました。そしてこのような状況は，一家における長男と次男以下との地位の差をますます大きなものにしました。戦前の旧家などでは，長男だけが特に大切に育てられ，次男以下は従属者のようにしつけられることも多かったのです。これはまさに差別でありました。いつ頃でしたか，首相であった森喜朗氏が「自民党は長男とし

て……」と語っていたことを思い出します。やはり長子家督相続が優越する北陸の人なのだ，と思ったことでした。

かつて明治民法は長男による家督相続を規定しました。しかし，西日本の多くの地域では，子供たちのうち最後に生まれた子を相続人とする，いわゆる「末子相続」が伝統的に存在します。それは，和歌山県の海岸部，瀬戸内海沿岸，佐賀・長崎・熊本，宮崎県の一部，鹿児島県の本土全域などです。末子相続では親夫婦と跡取りである末子夫婦の年齢差が大きく，親子の同居期間が短いので，広島県などでは，嫁姑の葛藤が生じにくいなどと言って末子との同居を積極的に評価する意識が見られます。末子相続の分布地域は同時に，夫婦単位に別世帯を形成する，いわゆる隠居制度が濃厚に見られる地域でもあります。こうした家族の小規模化への志向性，親子相伝による家の永続を絶対のものとはしない家族意識が末子相続の存続維持に深くかかわっているようです。

●

さて，**表1**は，五箇山のある集落で各家の戸主と主婦が，戦前において，地域社会内部でどのように言及されていたかを調べた結果です。なお，表での「等差」とは，それぞれの家格によってささえられた，かつての社会的地位のことです。1が最高で，6までの6ランクになっています。

A家の戸主と主婦が「ダンナサン」と「オクサン」なのは，彼らが，村に1人しかいなかった医者であり，その妻であったからです。どちらの形式も最も敬意度の高いものです。MとQは，Fと同じく，Bにつながる分家です。どちらも当主が亡くなって母子世帯になったため，かつての等差が下がったのです。「トッツァ」「カーカ」はFと同じです。このMとQを除けば，他の戸主の名称は等差のランクとほぼ対応しています。等差が地域社会の内部における各家の社会的階層を代表し，その階層性に対応して各語形が使い分けられているといえるのです。一方，主婦についてはA家の「オクサン」，B家の「オカカ」を除いて「カーカ」が多く，等差，すなわち社会的階層との間に使い分けがあまり認められません。なお，「オカカ」は「オトト」に対応して敬意度の高いものです。

●

私は，当該地域で親族語彙の運用状況の変化を追究していますが，その背景にあるのは，社会組織の変化とそれに対する人々の意識構造の変化です。

表2は，当地に存在した上平村立尋常高等小学校に1935（昭和10）年度に在籍していた生徒（31名）に面接して，彼らが，当時において，自分の「父」「母」「祖父」「祖母」をどのように呼んだか（呼称），またどのように言及したか（名称）を調べた結果です。表では敬意度の高い形式の順に並べてあります。なお，この時代には呼称と名称は区別されていませんでした。

「父」に関しては，オトト／トッツァ／トート／トー／トトの5段階があります。「母」に関しては，オカカ／オッカ／（ジャー）／カーカ／カー／ンバの6段階があります。ただし，ジャーとカーカの段階付けについてはよく分かりません。ジャーはトッツァに対応

等差	家	戸主	主婦
1	A B C D	ダンナサン オトト オヤジ トッツァ	オクサン オカカ カーカ カーカ
2	E F G	トッツァ トッツァ トッツァ	カーカ カーカ カーカ
3	H I	トッツァ オトーサン	カーカ カーカ
4	J K L	トート トート トト	ババ カーカ カーカ
5	M N O P	トッツァ トト トト トト	カーカ カーカ カーカ ンバ
6	Q	トッツァ	カーカ

表1．社会階層と親族名称の対応

	性	父	母	祖父	祖母
1	男	オトト	オカカ	オジジ	オババ
2	男	オトト	オカカ	オジジ	オババ
3	女	オトト	オカカ	—	—
4	女	オトト	オカカ	—	—
5	男	オトト	オッカ	—	—
6	男	オトト	オッカ	ジージ	—
7	男	オトト	カーカ	ジージ	バーバ
8	男	オトト	カーカ	—	バーバ
9	女	トッツァ	カーカ	—	—
10	男	トッツァ	カーカ	—	—
11	男	トッツァ	カーカ	—	—
12	女	トッツァ	ジャー	—	—
13	女	トッツァ	ジャー	—	—
14	男	トッツァ	ジャー	—	—
15	女	トッツァ	ジャー	—	—
16	女	トッツァ	—	—	—
17	女	—	ジャー	—	—
18	男	トート	カーカ	ジージ	バーバ
19	女	トート	カーカ	ジージ	バーバ
20	女	トート	カーカ	ジージ	バーバ
21	男	トート	カーカ	ジージ	—
22	男	トート	カーカ	ジージ	—
23	女	トート	カーカ	ジージ	—
24	男	トート	カーカ	ジー	—
25	女	トート	カーカ	—	—
26	男	トート	カーカ	—	—
27	男	トート	カーカ	—	—
28	女	トート	カーカ	—	—
29	女	トート	カーカ	—	—
30	男	トー	カー	ジー	バー
31	女	トト	ンバ	—	—

表2．1935年の親族呼称（話者13、14歳時）

	性	父	母	祖父	祖母
1	男	●	●	●	●
2	女	—	●	—	—
3	男	●	●	●	●
4	男	●	●	—	—
5	男	—	●	—	●
6	男	●	●	●	●
7	女	●	●	—	●
8	女	●	●	●	●
9	男	●	●	●	●
10	女	●	●	—	—
11	男	●	●	●	●
12	女	●	●	—	●
13	男	●	●	●	●
14	女	●	●	●	●
15	女	●	●	—	—
16	女	—	●	●	●
17	男	●	●	●	●
18	男	—	●	●	●
19	男	●	●	—	●
20	女	●	●	●	●
21	男	トー	カー	ジー	バー

●＝トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャン

表3．1965年の親族呼称（話者13歳時）

	性	父/名称	母/名称	祖父/名称	祖母/名称
1	男	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
2	男	オトーサン/●	オカーサン/●	—	—
3	男	—	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
4	男	オトーサン/●	オカーサン/●	●/●	●/●
5	男	オトーサン/オトーサン	オカン/オカーサン	●/●	●/●
6	男	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
7	男	オトーサン/●	オカーサン/●	オジーチャン/●	オバーチャン/●
8	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	●/ババー
9	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	●/ジーサン	●/バーサン
10	男	トーサン/●	カーサン/オカーサン	●/●	●/●
11	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
12	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
13	女	—	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
14	女	オトーオトー	●/オカーサン	—	バーバー
15	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
16	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
17	女	オトーサン/●	オカーサン/●	オジーチャン/●	オバーチャン/●
18	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
19	女	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
20	女	トーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/オジーチャン	●/オバーチャン
21	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
22	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
23	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
24	女	オトーサン/オトーサン	オカータン/オカーサン	●/●	バータン/●
25	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
26	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
27	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●
28	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
29	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	—
30	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	●/●	●/●

●＝トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャン

表4．1995年の親族呼称（話者13、14、15歳時）

していますが，しかしトッツァにはカーカも対応しています。大局としては，オトトにはオカカが，トートにはカーカが，トーにはカーが，そして，トトにはンバがそれぞれ対応していると言えます。なお，これらは，その子供たちだけからだけではなく，その家族の，さらにはその地域社会の全員からの呼称であり，名称でした。

表３は，上平村立上平中学校に 1965（昭和 40）年度に在籍していた生徒（21 名）に面接して，彼らが，当時において，自分の「父」「母」「祖父」「祖母」をどのように呼び，言及していたかを調べた結果です。先の 1935 年の時点とはその間に戦争を挟んでいますが，ここに大きな変容を見て取ることができます。それは，家の社会的地位に対応した形式のバラエティがまったく消失し，一つの形式に統合，一律化したことです。ある話者によれば，この変革は，いわゆる戦後民主主義の思潮のもとで意識的に行われたと言います。表によってそのことを確認してください。１人の話者を除いては全員が「父」「母」を，それぞれ新表現のトーチャン，カーチャンで呼んでいます。古い形式のトー，カーを使用する＜21＞は，表１での＜30＞と同じ家の人物です。なお，新しい形式についても，呼称と名称との区別はなされず，対象が，家族だけではなく地域社会の全員によって，このように呼ばれ，言及されていたのです。ちなみに，この地の戸数には大きな変化がありません。

表４は，上平中学校に 1995（平成 7）年度に在籍していた生徒（30 名）を対象にして，彼らが自分の「父」「母」「祖父」「祖母」をどのように呼び，言及しているかを，集合調査法によって調べた結果です。表では結果を男女別に配列して，呼称と名称とをそれぞれ「／」の左右に分けて掲げてあります。近年になって呼称と名称とが分離してきたからです。

指摘される点は，かつての新表現トーチャン，カーチャンが衰退し，その上にオトーサン，オカーサンがかぶさってきていることです。これはまさに標準への集中です。なお，「父」については，呼称でトーサンが２名，オトーが１名います。「母」については，呼称でオカータン，カーサン，そしてオカンがそれぞれ１名います。呼称において，その運用はすでに個人を中心とした個別的・標準的なものに変化しているようです。

興味深いのは，名称においてのみ旧形式（かつての新表現）のトーチャン，カーチャンを使う者が幾人か存在することです。ただし，ここで名称とするものは，友達に，「うちの～が」と伝えるという文脈における表現なので（家の中での場合などを推測すると）必ずしもそのすべてではないと思われますが，間接的な言及（refer）において地域社会の旧形式が残存するという実態に注目したいのです。なお，先生に対する場面においては，全員がオトーサン，オカーサンで，チチ，ハハと回答した生徒は皆無でした。当地のこの世代ではまだ内と外との弁別が習得されてはいないようです。

●

以上，五箇山における親族語彙の運用における変遷が，地域の人々の時代的な社会意識構造の変化と深く関わって，「階層性」から「一律的」，そして「標準化」というキーワードで明確に記述できることを指摘しました。